

1 活動名

「自他の良さに気づき、周囲とよりよい人間関係を築くためのトレーニング」
(コミュニケーションスキル・ソーシャルスキルを育むトレーニング)

2 活動の目標

- (1) 多様なトレーニングを通し、自身や友人の性格・特性についての理解を深め、自他の良さについて捉えさせる。
- (2) 多様なトレーニングを通し、他者意識を高めてよりよい人間関係を築くとともに、適切に伝える力を育む。
- (3) 様々な価値観に触れさせ、それらを受容した上で自身の考えや思いをしっかりと持ち、自他を尊重する姿勢を育てる。

3 バイカルチャラルの資質育成との関連

多様な価値観に触れさせると同時に、それらの良さを認め受容しつつ、自身の考えや思いを適切に伝える手立てを学ぶ。自他の良さに気づき、よりよい人間関係を築く手立てを学び、自身の良さを発揮する資質を育てる。

4 児童生徒の実態について

中学部は、第1学年が9名(男子6名、女子2名)、第2学年が11名(男子6名、女子5名)、第3学年が2名(男子1名、女子1名)で、生徒の総数は22名である。

約9割が国際結婚家庭であり、長く大連に住んでいる生徒は約6割である。入れ替わりが激しいと言われる在外教育施設において、小学部低学年から大連日本人学校に在籍している生徒が多く、落ち着いた学習規律や他者を温かく受け入れる支援的な雰囲気など、本校の良さの土台となって活躍している。ただ一方で、日本で生活した経験が少ない生徒も多いことから、様々な生徒の生活経験や考え・価値観を交流することで、多様な価値観にふれ受け入れる資質育成のきっかけにしたいと考えている。

本校の中学部は、全体的に日本語力が非常に高い。また、国際結婚家庭の生徒の大半は、高いレベルで日本語と中国語両方の言語を話すことができる。しかし、数名の生徒は日本語力が十分ではなく、日本語の日常会話は問題ないものの日本語での読み書きが難しい生徒、日本語の会話や読み書きに時間を要する生徒、日本語での日常会話に大きな課題がある生徒などが在籍している。

小学部から長年一緒に過ごしてきている生徒が多いため、学年に関わりなく非常に仲が良い。ただ、互いによく知っていて、言葉にしなくても伝わる環境だからこそ、相手の立場や思いをイメージしてコミュニケーションをとる力や、適切な言葉を選んで考えや思いを伝える表現力などの必要性を実感させ、育んでいくことが重要である。

つまり、本校の生徒たちが国際社会の中で良さを十分に発揮するためには、受容する力と同様、適切に表現する力や、どのような環境でもよりよい人間関係を築く力が必要だと考えられる。

5 活動について

本活動では、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルなどのトレーニングに取り組む。自分や友人の性格や特性について理解を深め、自他の良さに気づくことで、他者の良さを受け入れつつ、自身の良さに自信を抱くきっかけにしたい。他者を受け入れる受容性に磨きをかけつつ、自己肯定感を高めることにより、国際社会の中で良さを発揮するために必要な資質が磨かれると考えている。

また、コミュニケーションの手立てを学ぶことは、言葉を適切に選んで伝える表現力や相手の考えや思いをしっかりと聴きとる力、他者意識を大切にして話したり聞いたりする力など、日本語支援にも大きく関連していると考えられる。

最後に、自身の考えや思いを適切に伝える手立てやよりよい人間関係を築く手立てを学び、総合的な学習の時間など実際に様々な交流の場で活用する経験を通して、近い将来社会生活の中でそれぞれの良さを発揮していくことにつながっていくと考えている。

6 活動構成（総時数6時間）

時数	【学習活動】	【ポイント】
		◆バイカルチュラルの視点
第1時	「傾聴」 ●積極的に聴く手立てについて、ロールプレイなどを通し、実感させながら理解を深める。 ●話し手を意識し、よりよい人間関係を築く手立てを理解させる。	◆話し手の気持ちをイメージしながら聴くことで、よりよい人間関係を築く手立てとその効果の理解を深める。
第2時	「エゴグラム」 ●エゴグラムに取り組み、自分自身の性格や特性について振り返る。 ●友人との交流を通して、自他の違いについて理解を深める。	◆友人との交流の中で、他者との違いを理解し受容する資質を育てる。 ◆自身の特性を肯定的に捉えさせ、良さと課題に気づかせる。
第3時	「プラスのストローク」 ●相手に温かい言葉をかけることの有用性を、ロールプレイなどを通して、実感とともに学ぶ。 ●態度や声かけが、自身の評価につながることを理解する。	◆相手を意識して声かけをすることで、よりよい人間関係を築くことができ、自身の良さを発揮することにつながることを実感させる。

第4時	「怒りの温度計」 ●自身の怒りの傾向をつかみ、適切に対処するアンガーマネジメントについて学ぶ。 ●交流を通し、人はそれぞれ価値観・思いが違うことを実感する。	◆自身の性格や特性について振り返り、理解を深めさせる。 ◆他者との違いに気づかせ、相手の気持ちや考えをイメージして接することの有効性を捉えさせる。
第5時	「他者理解『砂漠の救助』」 ●砂漠で遭難したという想定で討論を行い、価値観の違いを学ぶとともに、合意形成の手立てとポイントを捉える。	◆人によって価値観が違うことを理解させる。 ◆価値観が異なる集団の中で、合意形成の手立てと必要性を捉えさせる。
第6時	「上手な断り方」 ●ロールプレイに取り組み、相手を受容しつつ人間関係を壊さずに断る手だてについて学ぶ。 ●自分の身を守るためにも断固として断る必要があることを学ぶ。	◆よりよい人間関係を築きつつ、しっかりと主張する資質を育てる。 ◆社会生活では、断固として主張しなければならないケースがあることを理解させる。



【他教科、日常生活への関連】

★総合的な学習の時間

本校の中学部の総合的な学習の時間では、以下のような外部との交流の機会がある。

「職場体験（中1）」 「修学旅行（中2）」 「JICA 出前授業（中3）」
「職場訪問（全学年）」 「キャリア教育講演会（全学年）」 「現地校交流（全学年）」
「日本の中学校との交流（令和2年度は全学年、令和3年度は1～2学年）」
「総合的な学習の時間発表会」

在大連の日系企業の大きな支援を受け、各企業への訪問や講演会の設定を実施している。

令和2年度からは日本国内の中学校とのオンラインでの交流を行っている。

（令和2年度・北海道北見市立高栄中学校 令和3年度・秋田県秋田市立山王中学校）

また、現地校に出向き、授業参観や部活動交流などを行う活動も実施している。

これらの交流の中で、トレーニングで学んだことを実際に活用する場面を設定している。

総合的な学習の時間発表会では、保護者やこれまでお世話になった企業の方々を招き、自身のテーマに沿って探究したことを、生徒全員がそれぞれ発表する。

★日常生活

運動会や中学部合唱など、学校の教育活動の中でトレーニングの成果が生かせるよう、年間行事予定と関連付けて活動を計画・実施する。そのことによって、学んだことを実際に活用する機会が生まれ、確かな理解と定着につながっている。

7 資料



トレーニング「上手な断り方」
ソーシャルスキル・人間関係



トレーニング「砂漠の救助」
他者意識と合意形成

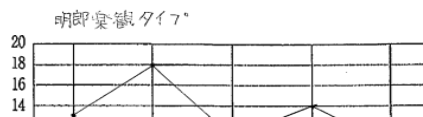
エゴグラムのワーク

あてはまる	→ 2
どちらの場合もある	→ 1
あてはまらない	→ 0

氏名 平野 美幸

											合計						
1	1	2	11	2	16	21	2	2	31	1	0	41	2	0	13	CP	
2	2	7	2	12	17	22	2	27	32	2	37	2	42	2	47	18	NP
3	1	8	0	13	18	23	2	28	33	1	38	2	43	1	48	11	A
4	2	9	2	14	19	24	2	29	34	1	0	1	39	1	44	49	FO
5	2	10	1	15	20	25	1	1	35	0	1	0	40	1	45	50	AC

グラフに記入をしよう!



「怒りの温度計」 2年 (相模愛)

自分は、どんなときに「怒り」を感じるだろうか。それぞれの場合に感じる怒りについて、その怒りを温度に表してみよう。

怒りの温度	「怒り」が発生する内容
100℃ もうガマンできない。限界点!キレる状態になる。	・最低な態度で接してこられたとき。 ・大事なことを言ったのに、無視されたとき。
80℃ 強い怒りを感じるが、何とかガマンできる。納期があれば...	・自分の悪口を言われたとき。 ・嫌なうそを流されたとき。
60℃ 40℃よりも、少し強く怒りを感じる! 「腹が立つ〜!!」	・人の話を聞かないとき。 ・集中させてくれないとき。 ・なんでも他人任せにされたとき。
40℃ いらいらするなど、やや怒りを感じる。でもまだ割と冷静。	・変なあだ名で呼ばれること。急に呼び捨て。 ・うるさいとき。 ・性格のマイナスを言われたとき。

「怒り」が発生した場合の対処方法

冷静は、
静かに軽蔑
怒らず、理由を聞く
ストイックに辛抱

ワークシート「怒りの温度計」

8 考察

【成果】

- ◆伝え合うことの大切さや必要性を実感し、しっかりと話し合うことや、適切な声かけを大切にする姿勢が育ってきた。また、学校行事等で小学部の児童への接し方も、学びが生かされている場面を見ることができた。
- ◆様々な価値観があることを理解し、受け入れた上で適切に主張できる生徒が育ってきている。生徒同士の間では自分の思いを丁寧に説明しようとする場面が増えた。
- ◆自分自身を前向きに振り返ることで、自己肯定感を高める生徒が増えた。特に、中国ルーツの生徒は、日中両方の価値観を理解していることに自信を深める様子が見られた。

【課題】

- ◆成果を数値化・可視化する手立てがあまりなく、生徒の変容を見取ることが主たる評価になっている。
- ◆本活動と他教科・領域での教育実践と関連付け、より効果的な日本語支援・バイカルチュラルの資質育成につなげていく余地が十分にあると考えられる。
- ◆本校を卒業した生徒が、学んだことをどのように生かしているか、評価や検証を継続する手立てが必要である。

【まとめ】

本活動を通して、本校の生徒たちの良さである支援的風土や受容性に更に豊かにすると同時に、生徒たちの課題である「表現する力」の改善にもつながった。特に、コミュニケーションの手立てを具体的に学ぶことが、生徒たちの自信や意欲を高めるなど、大きな成果があったと考えている。また、コミュニケーションの手立てを学ぶ中で、言葉を適切に選んで表現する力や相手の考えや思いをしっかりと聴きとる力など、日本語力の育成につなげることができたと感じている。

さらに、本活動の中で様々な価値観を受容することが、他教科などの学習活動で日中両者の特徴を肯定的に捉える生徒の増加につながったと考えている。

ただ、本活動の評価は数値化・視覚化することが難しく、その手立てを確立していくことは大きな課題である。併せて、本校を卒業した生徒たちの活躍と学びの関連を検証する手立ても考えていかなくてはならない。